



村山さんの眉毛に魅せられて

1994（平成6）年6月30日、自民、社会、新党さきがけ3党の連立政権合意を受け、第81代首相（～1996（平成8）年1月11日）に就いた村山富市さんが、昭和百年に当たる今年の10月17日、老衰のため死去した。101歳だった。八の字に垂れ下がった長く白い眉がトレードマーク。素朴な語り口と飾らない人柄で知られ、支援者には「トンちゃん」の愛称で親しまれていた。優しい人柄と聞き上手は、国会議員で際立っていたという。

村山さんが首相に就いた日の記憶が、私には鮮明に残っている。その年の4月1日、多度津水産高校（現多度津高校）の校長を拝命し、その日は確か全国水産高校の校長会があり、上京していた。その場へ、「日本社会党の村山さんが首相就任」のニュースが飛び込んで来て、会員の皆さんの間で一頻り話が弾んだのだった。

私は農業経営高校へ転勤していた。村山さんが首相を退陣してから間無しだったと記憶している。綾南町（現綾川町）の藤井賢町長（農業経営高校同窓会長）さんから電話で誘われた。



「校長さん、今夜空いとるかい。村山さんが今夜高松へ大分から来るんや。一緒に行こうや」

「村山さんって、首相やったあの村山さんな？」

「気さくな人やきに心配せんでええ。校長さんとは話が弾むと思うぞ」

二人で宿舎へ訪ねると、本人が出て来てにこにこ顔で迎えてくれ、直ぐに町長さんが私を紹介してくれた。にこやかな笑顔に、あのトレードマークの白い眉を見て、即座に緊張がほぐれた。旧知であるような錯覚さえ覚えたのだった。町長さんがよく私を誘ってくれたと、今でも感謝している。

「自分から首相になりたいとか、なろうなどと思ったことは一度もなかった男が、いきなり一国の宰相（さいしやう）でしょう。そんな私がイタリアでのG7ですよ。緊張の連続で疲れ果てましたよ」

これが話の始まりだった。首相の外遊には通常奥様が帯同されるらしい。ところが奥様から「私には無理だから娘に代役を頼んだら」と言われたらしい。村山さんは仕方なく娘さんを帯同してイタリアへ行かれた。『奥様はどうして行かれなかったのかなあ。ご主人の大仕事なのに…』と思いつつ、その時は聞き流した。奥様は腰を痛めていたことを後で知った。

会議の内容を、誰がこう言ったら、誰がこう反論したとか、自分はこんな発言をしたとか、面白く話してくれて聞き入った。藤井町長さんの相槌を打つのが上手なのにも感心し

た。私は「うん、うん」と村山さんの並外れた記憶力に感心しながら聞いた。

「漁師の家に生まれ、11人きょうだいの六男ですよ。僕は小さい頃は全く勉強せんかった。親も勉強しろなんて言うたことなかったなあ。きょうだいはみんな親の手伝いをしていた。その合間に遊んだなあ。……20歳になったら兵隊になって戦争に行くと決まっていたからなあ」

話を聞いた大部分は、1995（平成7）年に閣議決定して終戦記念日に発表した「戦後50年談話」であった。藤井町長さんが話を向けたように思う。私も聞きたかったことだから聞くのに気合が入った。村山さんの白い長い眉毛を見詰めて、



「うん、うん」とうなずきながら聞き入った。歴代政権になかった言葉。

先の大戦を「国策は誤り」と断定し、「侵略」と明言し、「反省とお詫び」である。発表された数年前には新聞で全文を読み、これは村山政権の神髄であると思っていたが、話を直接聞いてそれは確信に変わり、それまでに数倍加して村山さんの大のファンになったのだった。「閣議決定の際、反対する大臣が居れば、罷免する覚悟でしたよ」これを聞いて、ああ、村山さんはこれを発表するために首相を引き受けられたんだと、胸にじいーんと来た記憶がある。

発表した6ヶ月後に突然退陣を発表した。今日は10月23日（木）の毎日新聞14面の「今日も感いて日が暮れる」（オピニオン編集部吉井理記）の中に次の一文を読んだ。

村山氏は96年1月に退陣する。翻意を促す亀井氏に「亀さん、すまん。

今辞めないと、自民党に首相の座を返してやれんのだ」と返したという。

偉いよあの人は、と亀井氏は繰り返した。

村山さんの「戦後50年談話」は、小泉純一郎元首相の「60年談話」に引き継がれ、この10月10日（金）に自民党保守派の反発を考慮し、今回は閣議決定を経ないで発表された石破茂前首相の「戦後80年所感」にも引き継がれている。

安倍晋三元首相の「70年談話」については、村山さんは「だいぶ中身が違う印象を与えた」と批判した。

村山さんの話を聞いて記憶の鮮明なうちに、作文に書き残しておけば良かったと後悔している。後悔しつつも今に鮮明に浮かんで来る言葉がある。「人生には巡り合わせがある。その時に逃げてはいけない」である。話の中で何度も聞いた言葉、これは村山さんの生活信条であったのだろう。

高校を卒業するまでは、散髪屋へは行かずに、母親がバリカンで髪を剪んでくれた。そして時々、左右の眉の間を剃刀で剃ってくれた。剃らないと左右の眉が続いてしまうからだ。大学の4年間は学内にある理容室へ行った。代金は30円だった。



教師になって以来だから、もう既に64年もお世話になっている行き付けの散髪屋がある。丁度2年前のこと、その散髪屋へ行って椅子に座ったら、何故か不思議なことに「村山さんお元気なんだろう。私が84歳だから村山さんは99歳、亡くなった話は聞かないから元気なんだろうなあ」と思っていたら、村山さんの顔がはっきりと浮かんで来た。祖父・品造の眉毛も村山さんと同じ位長かった。「ワシは品造の孫だ。眉毛を切らなければ村山さんくらい伸びるかも」とふと考えた。座席に着いて、「**今日から眉毛は切らないで下さい**」とお願いした。

切らなくなって丁度2年が過ぎた。大分伸びてきた。どこまで伸びるか。もう少し元気でいて、見届けたいと思っている。

ここまで書いて、懐かしく思い出したことがある。それを書いて終わりとしよう。

2001年3月から2002年3月まで、私は教育改革政策アドバイザーとしてウズベキスタンで仕事をした。当時は日本には未だ殆ど知られていない国だった。私のゼミの受講者に、アフガニスタンとの国境に近いテルメズ出身のカビロバさん（女性）がいた。彼女の眉は左右が完全に繋がっている。通訳のサフィーナ（女性）にそのことを話したら、

「彼女が羨ましいです。**左右の眉が繋がっていることが、美人である最高の条件です**」と教えてくれた。サフィーナの眉は長くて太くて綺麗だったが繋がってはいなかった。



また、こんなこともあった。ウズベキスタンで「太陽の国」と言われている西部の都市、ウルゲンチとヒヴァへ出張した時、案内人のサンジャールさん（男性）に、「あなたの眉は太くて長くてとても綺麗だ。気に入ったよ」と話したら、「ありがとうございます。私はイラン人の血を引いています。でも、あなたの眉も素晴らしいです」と返された。日本では、こんな会話はしたことがない。

（令和7年11月1日）